

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



「誰かのために」

先日、二ツ井小学校の特別支援学級の授業を参観しました。知的障害学級と自閉・情緒障害学級の子どもたちが、自分たちで育てた枝豆を調理する合同授業でした。調理室に入った瞬間、三角巾とエプロンを身に着けた子どもたちが、「おはようございます」「おいしい枝豆を作ります」と、元気な声と弾ける笑顔で出迎えてくれました。子どもたちの楽しそうな表情から、「おいしい枝豆を作るぞ」という意欲が伝わり、一緒に参加したくなりました。残念ながら、授業の導入部分だけで失礼したため、みんなで安全に協力して調理したり、いい顔で試食したりする場面は参観できませんでしたが、他の学級の授業参観中、枝豆のおいしそうな匂いがほのかに漂い、また参観したくなりました。

調理実習を通して、子どもたちはたくさんの力を身に付けることができます。

物を見る力、模倣する力、段取りする力

衛生面や安全面に気を付ける態度

三角巾やエプロンを身に着ける、片付けや掃除などの生活習慣の定着

曖昧な言葉（少々、半分、3分の1）の概念を理解する力

感覚的な言葉（甘い、酸っぱい、塩っぱい、辛い）の獲得

共有体験による社会性やコミュニケーション能力

みんなで協力して完成できたという一体感や達成感

学校や家庭が連携することにより、上記の力の定着・・・など



更に、誰かのために料理を作ることを計画すると、料理を食べる人の笑顔を作ることになり、相手を思う優しさになります。料理を覚えることは、優しさを感じることであります。料理が完成するまでには時間がかかります。時間がかかるということは、それだけ食べてもらう相手を思いやる時間が増えることになります。料理は、鍋やフライパンで優しさをコトコト煮込んでいることになります。

栽培活動を通して、買い物学習、除草や水やりの作業、収穫・販売活動、お店屋さんやレストランのオープンなど、子どもの実態に合わせて多様な活動を系統的・発展的に計画することができます。そこに誰かのためにを取り入れることで、子どもたちは長期間に及ぶ活動にも興味・関心をもちながら、意欲的に取り組めるようになります。誰かのために活動することは、学びの原動力となります。



とれたて直送便



☆「ありがとう」と「自分の名前」

子どもに伝わる効果的な話し方の一つとして、「穏やかに・近付いて・静かに」があります。そこに、子どもの名前を入れると、もっと注意を引き付けることができます。自分の名前は、生まれたときから数え切れないほど聞いているため愛着があります。「ありがとう」と同じように、最も心地よい音、聞き取りやすい言葉だと言われています。周りが騒がしい状況であっても、自分の名前が呼ばれると必ず気付きます。大事なことを伝えるときは、子どもの名前を呼びましょう！